入選

北沢　華恋（きたざわ　かれん）　浅川中 1 年生

作品名：「天使のにもつ」

図書：天使のにもつ

この本の主人公で中学二年生の斗羽風汰は、私のクラスにもいるような軽いノリの男子です。子どもと遊んでいれば良い楽な仕事だと思い、五日間の職場体験にエンジェル保育園を選びました。遊んでいるだけで楽しいはずの風汰は、保育士の過酷な仕事に、子どもなんて汚いしうるさいし、「いやだ、きつい、帰りたい」と心の中で叫び続けます。しかし、毎日何かしらの事件が起きる保育園で忙しく過ごし、様々な人と触れ合い、多くの体験や毎日起きる小さなトラブルの解決を通じて、いつでも子どもの事を第一に考える保育士の仕事の大切さに気付いていきます。毎日子どもを預かって、面倒を見るだけではなく、ケガをさせないように気を配り、遊びを通じて様々なことを学べるように導き、事故のないように食事をさせ、お昼寝をさせるなど、まるでお母さんのように心をくだき、愛情を注いで大切に育てていく様子に、風汰と同じように私もおどろきました。そして、どんなに保育士が頑張って子どもに接していてもお母さんの代わりにはなれないんだという事も改めて考えました。

園児の中に「しおん君」という優しい子がいます。しおん君のお母さんは子育てが苦手なようで、虐待やネグレクトの心配もあります。しおん君はお母さんが大好きです。だから汚れた服を洗いたくないお母さんのために、思いきり外で遊んで服を汚さないように気をつかい、みんなと遊ばないようにしています。私の中には、そんな健気なしおん君を可哀想だと思う切ない気持ちと、しおん君だけ本を読んでもらったり、抱っこしてもらったりしていて、それは他の子どもたちの目から見ても「えこひいき」なんじゃないかというモヤモヤした気持ちがありました。しかし、園長先生の「平等って全員に同じことをしてあげることじゃないと思うの。一人ひとり、その子にとって本当に必要なことをしてあげる。」という言葉が、色々な考えがめぐる私の心にずっしりと響き渡りました。自分の無力さと、そばにいてあげることの大切さ、寄り添うことの意味を考えさせられました。私が親から与えられて

いた愛情が当たり前ではないこともあるという事。そして中学生という、子どもでも大人でもない自分にできる事には限界があるという事。風汰もしおん君と過ごす時間の中で成長していきます。

　また、「子どもがどうしたらその子らしく、幸せに生活できるのか」という言葉を読んだ時、保育士という職業はすごいなぁ、としみじみと感じました。ただ小さい子どもが可愛いから、子どもが好きだからという気持ちだけではできない仕事だとも思いました。楽しく遊ぶ中にも成長へのねらいや目標があるという事を、本を読んでみるまで私は考えたこともありませんでした。

　私の通う中学校でも、中学二年生になると職場体験があります。今年度は新型コロナウイルス感染症予防のために、職場体験は残念ながら中止になるようです。職場体験は、いつもと違う「社会」と自分の関わりについて考えさせられる貴重な体験だと思います。私の日常は、学校、自宅、習い事のピアノ教室で過ごします。今年は新型コロナウイルス感染症予防のために外出を控えているので、基本的に出会うメンバーはいつも同じとなり、知らない人と関わる機会自体がありません。だからこそ、同じ年齢の友達や家族と過ごす中では知ることのできない事を職場体験の中から学び、自分の将来についても見つめる良い機会にできると良いと思います。私は現在中学一年生なので、新型コロナウイルスが終息するなどの状況によっては、職場体験ができるようになると期待しています。その時にどのような職場に行けるのかは分かりませんが、様々な人と出会い、働く現場の方の話を聞くことで働かなければ知り得ないことを教えてもらい、自分の将来について、自分と向き合って考えたいと思いました。職場体験後の風汰の将来の夢の一つには、保育士になるという選択もあるんじゃないかと思いますが、エンジェル保育園で成長した風汰のように、私も職場体験の日々で成長できたら良いな、と思っています。